

5月4日 復活節第3主日

使 3:13～19 1ヨハ 2:1～5a ルカ 24:35～48

1. 1ヨハ

今年も全世界のカトリック教会で、復活徹夜祭の洗礼の儀によって新しい民が加えられ、すでに信者であった人々も自らの洗礼を思い起こして、共に喜びのうちにミサをささげています。

救い主イエス・キリストは引き渡される夜(1コリ11:23)、御自分の死と復活の記念を教会に託して、聖体のいけにえ(ミサ)を制定されました。ですから洗礼を受けて救われることは、共にミサをささげる共同体に加えられることであって、聖書はこのような信者の生き方を「神の掟を守る」「互いに愛し合う」と表現しました。このミサの重要性を明確に述べて、典礼憲章は次のように教えています。

「したがって教会は、キリスト信者がこの信仰の秘義に外来者、あるいは無言の傍観者として列席するのではなく、儀式と祈りによってこの秘義をよく理解し、聖なる行為に意識的に、敬虔に、また行動的に参加し、神のことばによって教えられ、主のからだの食卓において養われ、神に感謝をささげ、ただ司祭の手を通してだけでなく、信者も司祭とともに清い供え物を奉獻して自分自身を奉獻することを学び、こうしてキリストを仲介者として日々神との一致と相互の一致の完成に向かい、ついには神がすべてにおいてすべてとなるように全力を傾注しているのである。」(48)

2. 使

v.15 「神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。」

信じて洗礼を受けたすべてのキリスト者にとって、使徒たちは主の復活の証人であります。洗礼によってイエス・キリストが私たちの主となってくださったこと、私たちが罪と死と悪魔の力から救い出し、贖って御自分の民としてくださったことの証人は使徒たちなのです。その罪とは、「聖なる正しい方を拒んで、…命の導き手である方を殺してしまった」(vv.14-15) 罪であり、「悔い改めて立ち帰る」(v.19) とは、洗礼の秘跡によって「イエス・キリストは主である」(フィリ2:11) と告白する民に加えられることであります。

このイエスを復活させた「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたち(旧約のイスラエルの先祖の神」(v.13) が、私たちキリスト者の神とされたことを、現代の教会は再認識する必要があります。キリストの救いが単なる心の中の思想ではなくて、罪と死からの現実の贖いであって、やがて神の国への復活に至るものであるように、私たちの神は抽象的な空想の神ではなくて、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、イエス・キリストの父なる神なのですから。

3. ルカ

キリスト教は使徒たちの宣教から始まったという非常に明確な事実を、私たち信者は新約聖書を自分で読むことによって確認することが大切です。

20世紀の教会において、それが聖職位階にある人々であれ、一般の信者であれ、多少とも聖書について論じる人々の大多数が、これまで殆どろくに聖書を読んでいない単なる素人たちであったという事実を、21世紀の教会は率直に認めなければなりません。

使徒パウロはその弟子テモテについて、「あなたは、…… 幼い日から聖書に親しんできた ……」(IIテモ3:15)と言っています。またマケドニアのペレアで宣教したときの報告で使徒言行録は、「このユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日聖書を調べていた」(使17:11)と述べています。

「人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでも」(Iコリ1:26)なかった初代教会の信者たちが十分に理解出来た聖書を、現代の私たちも普通の人間として読むことが出来ない訳はありません。私たちは“ろくに読みもしないで、無責任な仕方論ずる”20世紀のキリスト教の論客たちの愚を繰り返さないために、各自が自分で読むことによって自ら聖書に精通したいものです。

v.44 「イエスは言われた。“わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。”」

そしてイエスは弟子たちの目を開いてくださり、聖書全体にわたって説明されました。使徒たちから始まった福音の宣教は、このように復活のキリストによって使徒たちに示された旧約聖書の再解釈に基づいていたのです。

vv.47-48 「“…… また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる”と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」

使徒たちが宣教した「罪の赦しを得させる悔い改め」は、現代の教会にとっても「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ1:16)であり続けており、21世紀の教会で共にミサをささげている群れは、主キリストが罪と死と悪魔の力から救い出し、贖って御自分の民とされた人々なのです。そして聖伝と聖書を通して語る使徒たちは、21世紀の教会の宣教においても、今もその証人であり続けています。

私たちのミサは、主の再臨と神の国の到来の日まで、これからも続けられて行きます。

アーメン、ハレルヤ。

5月11日 復活節第4主日

使 4:8～12 Ⅰヨハ 3:1～2 ヨハ 10:11～18

1. ヨハ

v.11 「わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは羊のために命を捨てる。」

羊のために、羊に代わって御自分の命を捨ててくださったイエス・キリストは、罪と死に勝利して復活されました。私たちキリスト者は、洗礼によってその死と復活に与かる者とされ、罪と死の支配から解放されてキリストに属する民となりました。私たちが“キリストによって”、“キリストを通して” 贖われ、救われたのは、そのいけにえとしての死によるのであり、復活のキリストはこれを記念するミサを教会に託されたのでした。ミサが本質的に“いけにえ”であることは、使徒継承による教会の確固たる伝承であり、現代の教会においてもキリストの救いの力は、ミサを通して私たちの間に働いています。

主イエスが「自分の羊」(v.14)と呼んでおられることから分かるように、初代教会の宣教が始まったときからいつも、この世にはキリストのものではない羊たちがたくさんいました。最初に福音は各地のユダヤ人を対象にして宣べ伝えられましたが、それは多くの羊たちの中からキリストの羊を呼び集める働きであると理解されていました。間もなく福音の宣教が異邦人世界に広がるようになり、そこからキリストの羊たちが呼び集められて行きます。キリストの福音の宣教によって異邦人がユダヤ人と一緒に神の国の約束に与かる者となるという「秘められた計画」(ロマ 16:25、エフェ 3:3)が、教会を通して展開するのです。

v.16 「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」

2. 使

このように教会を通して進められる福音宣教が、キリストの羊とそうでない羊を分ける働きとなるということを、聖書はいつの時代にも教会に向かって語って来たのでした。福音宣教は「滅びる者には死から死に至らせる香りであり、救われる者には命から命に至らせる香りです。」(Ⅱコリ 2:16) 生きている者と死んだ者を裁くために来られる終末のキリストは、キリストの羊たちにとっては、「わたしたちのために呪いとなって」(ガラ 3:13) 私たちが受けるはずの裁きをすでに十字架の上で私たちに代わって受けてくださった、そのような審判者(使 10:42)なのです。

v.12 「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

キリスト教を多くの宗教の中の一つの宗教の名称に過ぎないものと考え、その時代ごとの思想に迎合した新しい福音を考え出そうとする人々が、いつの時代にも絶えませんでした。最初の使徒たちによる宣教のキリストを拒否して、その時代の哲学や思想によって再解釈された別のキリストを説く人々が、教会の歴史には満ちています。

しかし教会は、使徒たちが伝えたキリストの福音の宣教によってだけ、真のキリストの教会であり続けま

す。そしてそれを受け継ぐ教会だけが“使徒継承の教会”(ニケア・コンスタンチノーブル信条)なのです。

3. 1ヨハ

使徒たちが伝えた福音によれば、生まれながらの人間は“神の怒りを受けるべき者”(エフェ2:3)であって、そのまま神の子なのではありません。使徒パウロが「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」(IIコリ5:17)と語った通り、人は洗礼によって「新たに生まれ」(ヨハ3:3)で始めて神の子とされるのです(ガラ4:5)。

v.1 「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。」

そして神の子であれば、今はまだ見ることの出来ない将来の神の国を「忍耐して待ち望むのです。」(ロマ8:25) なぜならその日には私たちは、御子に似た者として(v.2)神の国に復活することを知っているからです。

ミサを共にささげている全世界の教会で、今朝の集会祈願は次のように祈られました。

「キリストの声に従うわたしたちがあなたの国に導かれ、聖人とともに喜びを分かちことができますように。」
アーメン、ハレルヤ。

5月18日 復活節第5主日

使 9:26～31 Iヨハ 3:18～24 ヨハ 15:1～8

1. ヨハ

キリスト教の起源が使徒たちの宣教にあると語るとき、その使徒たちの宣教が、十字架にかけられて死に、神が死者の中から復活させられたイエス・キリスト御自身に由来するという事実に注目する必要があります。

ヨハネ福音書の15-17章は、主イエスが引き渡された夜の弟子たちとの晩餐の席における“決別の説教と祈り”という形式で記述されています。言うまでもなく、ヨハネ福音書は当夜の模様を録音したテープからこれらの部分を文書に書き起こしたものではありません。そうではなくて、恐らく一世期末と思われる頃の教会の信者たちに向かって、十字架と復活のキリストに由来する使徒的福音を理解させ、キリストの体である教会がこの福音にしたがって正しく歩むことを目的として、書かれ編纂されたのでした。

ですから、ここでは“ぶどうの木”とは復活の主イエス・キリストのことであり、教会の信者たちはその枝に例えられています。洗礼を受けて救われるとは、ぶどうの枝になることであって、その結果豊かな実を結ぶようになることが期待されています。

このように使徒たちが宣教したキリストの福音とは、使徒たち自身がそうであったように、その後の時代の信者たちも十字架と復活のキリストに対してその枝のように連なって、教会を造り上げて行くことを命じているものとここでは理解されているのです。

2. 使

使徒パウロは他の使徒たちとは違って、生前のイエスによってではなくて、復活のキリストに出会って使徒として召されました。使徒とは主イエス・キリストによって直接に召され、福音の宣教と教会造りのために遣わされた人々であります。この使徒たちに委ねられた福音宣教は、決して「人から受けたのでも教えられたのでもなく」(ガラ 1:12)、十字架と復活の主に由来していました。ですから一人一人の使徒はそれぞれの個性と特質を持った別々の人たちではあっても、その宣教する福音は使徒たち全員に共通するもの、そして使徒たち全員で共有するものでなければなりません。

パウロが復活の主から使徒として召されて数年後に、エルサレムの使徒たちのもとを訪ねて滞在したのは、このためでありました。使徒言行録に記録されているパウロの異邦人伝道における大きな働きが、他の使徒たちと異なる「別の福音」(ガラ 1:7)を宣教することとならないための、いわば準備的な作業であったとすることが出来ます。

v.31 「こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。」

代々の時代の教会の信仰は、それが使徒たちの宣教の上に固く立つものである限り、正統的なもので

あると主張することが出来ます。いつの時代でも、教会にせよ信者個人にせよ、その信仰がいかに自発的主体的であっても、使徒たちの宣教とは別に独立して直接にキリストと繋がっていると主張するとき、それは正統的なものではありません。現代の教会も、使徒たちの宣教を通してその源泉である復活のキリストに出会い、聞き、その枝として連なることによってだけ、正統的な教会であると主張出来るのだということを理解しなければなりません。

3.13ハ

神の子イエス・キリストの名を信じる(v.23)とは、もちろんいつの時代にも個人の主体的な決断の事柄ではあります。しかし、それが“使徒たちの宣教する福音のキリスト”であること、従ってイエス・キリストの名を信じるとは“使徒たちの宣教する福音を信じること”であることを忘れてはなりません。それはキリストの体を造り上げて行く(エフェ 4:12)福音でありますから、「互いに愛し合う」(v.23)ということもその線上で理解されねばなりません。「この方がわたしたちに命じられたように」(v.23)とはそういう意味です。互いに愛し合いなさいという主の命令は、共にミサをささげている共同体である教会を第一の対象としています。信者一人一人は単なる個人として主観的にキリストに繋がるのではなくて、使徒たちの宣教という土台の上に立つミサ共同体を通してこそ、本当にキリストに連なる「ぶどうの枝」となるのです。

実に復活して天に上げられたキリスト御自身が、使徒たちの宣教を通し、また現代のミサを通して私たちに出会い、語りかけ、私たちを「いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる」ことに感謝しましょう。

アーメン、ハレルヤ。

5月25日 復活節第6主日

使 10:34~48 Iヨハ 4:7~10 ヨハ 15:9~17

1. Iヨハ

v.10 「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

教会は、洗礼の秘跡によってキリストに結ばれた神の子たちの共同体であって、この世から区別された民です。ヨハネ文書は、この教会の信者たち相互の一致と結束を、「互いに愛し合いなさい」という表現で特に強調しています。

これは決してすべての人々への神の愛を否定しているのではなくて、そうではなくて別の観点から愛を説明しているのです。それは、その独り子をお与えになったほどのこの世への神の愛が、教会という特別な民をこの世から区別されたという観点です(「神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」(使 20:28)参照)。教会は、この世から贖われて神の子とされるほどに神の愛を受けた人々の共同体ですから、特に互いに愛し合って一致結束するべきだと教えているのです。

2. ヨハ

神がどれほど私たち教会を愛してくださるかは、その御子イエス・キリストの十字架のいけにえが記念されるミサによって、代々の時代の信者たちに伝えられて来ています。

v.13 「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

私たちのために命を捨ててくださったのは、他の誰でもなくて、御子イエス・キリストでありました。この主が、この主だけが、私たち教会に「互いに愛し合いなさい」と命ずることの出来るただ一人の方なのです。

このように聖書が、特に福音書がミサの中で朗読されるとき、復活のキリストは今も御自分の体である現代の教会に向かって語り、使徒たちが聞いたのと同じことを私たちに聞かせてくださいます。ですから現代の信者である私たちも、福音書のイエスの言葉を最初に使徒たちが理解したように理解しなければなりません。ミサに集う私たちは単なる書物としての聖書を読んでいるのではなくて、復活して今生きておられる主イエス・キリストの御言葉を聞いているのです。

3. ヨハ

復活のキリストは福音宣教のために使徒たちを任命して、これを派遣されました。この使徒たちの宣教によって、原始キリスト教は当時の地中海世界に急速に広がって行きました。ユダヤ人だけでなく異邦人にも、すべてその宣教によって主イエス・キリストを信じた人々には洗礼が授けられて、共にミサをささげる共

同体が各地に育って行きました。

v.16 「わたしがあなたがたを任命したのである。」

この用語は、後になって教会が叙階の秘跡と呼ぶものの起源を示しています。使 20:28 ではエフェソの教会の長老たちの任命に、I テモ 1:12, 2:7、II テモ 1:11 では使徒パウロが自らの召命に、そして I コリ 12:28 では教会の中のいろいろな奉仕者たちの選任に、同じ用語が用いられています。

復活の主によるこの使徒たちの任命という特別な恵みと賜物を、使徒後の教会は受け継ぐことを重要と考えて、そこからやがて教会の聖職位階制度が整えられることとなりました。私たち現代の信者たちも、またミサを司どる司教や司祭も、決して使徒ではありませんが、それにもかかわらず教会は最初の使徒たちに与えられた復活の主からの恵みと賜物を受け継ぐことによって、今日まで同一の教会であり続けて来ました。ですからどんなに時代が変わっても、教会の土台はいつも同じ使徒たちの宣教した福音であり、教会の頭は復活して天におられる主イエス・キリストなのです。

vv.12-13 「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

これはキリスト教がこの世に向かって誇らしげに教える道徳の理想のように、ある人々には考えられて来ました。しかし、復活して今も天におられるキリストは、この聖句を通して他ならぬ現代の教会に向かって語っておられるのです。私たちのために命を捨ててくださったのは、他の誰でもなくて、御子イエス・キリストであであり、そしてこのキリストが、私たち教会に「互いに愛し合いなさい」と命じておられるのです。

使徒たちの宣教した福音を自ら聞く教会だけが、またこの世に対する使徒たちの使命にも与かることが出来ることでしょう。使徒たちの使命は、その宣教によって救われる人々を日々教会に加えて一つにする(使 2:47)ことに他ならないからです。 アーメン、ハレルヤ。